

チームオレンジの取組（後志総合振興局管内：事例④）

岩内町	
チーム名【	チームオレンジ ななかまど】
タイトル【	チームメンバー自身の介護予防にもなる活動】

1 活動の概要

活動開始時期	令和5年6月から
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☒ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	月1回(第4週月曜日14時から15時まで)
参加費・利用料金	無料
運営財源	☒ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	代表者：過去に地域おこし協力隊として活動し、現在、多世代が利用できる運動施設を運営している方、 メンバー：認知症家族会の会員で看護師をしていた方、運動教室に参加し認知症について勉強してみたいと希望する方など
チームオレンジの 類型	☒ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☐ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

・町の地域おこし協力隊として活動していた方が、現在運動施設を運営。その方が町の高齢者福祉に興味があり、高齢者から多世代の人が集える場所をつくりたいと考えていることを知り、チームオレンジとして活動してみないかと包括より提案し、活動をスタートした。 ・参加メンバーは50代後半から70代、参加目的は認知症の理解を深め、自分自身の介護予防に努める事だった。 ・当初、チームオレンジの具体的な活動がイメージできず、月に1回程度開催していたステップアップ講座への参加と講座の内容を一緒に検討。その後、チームオレンジとしてどのような事が出来るか考えていただき、定期開催していた認知症カフェの準備や手伝い、当日のホスト役としてまずは参加

者と接することを目標に活動を行う。

- ・認知症カフェに参加していく中で、認知症の当事者や家族の方と話す機会も増え、認知症カフェの内容や企画に対し、活発な意見も出るようになった。今後の活動として、話し相手や見守り役もできるのではと意見が出たため、ステップアップ講座で傾聴の基本について学ぶ機会を作った。
- ・現在は、施設などに出向き通所や入所の利用者さんのお話し相手を行ってみたいなど、チームメンバーから具体的な活動内容について意見が出るようになっている。

3 活動内容

- ・代表者の方が経営している運動施設を会場とした認知症カフェを年3回開催（チームオレンジメンバーが、カフェの企画や準備、参加者の話し相手役などを行う）
- ・町内他機関（高齢者施設）で開催している認知症カフェに参加
- ・認知症関連の研修会や会合へ参加、ステップアップ講座への参加、定例会で事例検討や情報交換、今後の活動内容について話し合う
- ・認知症サポーター養成講座の手伝い

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・医療、福祉の仕事の経験者や、経験のない一般の方がチームメンバーとして参加しており、双方の考え方に差が出る可能性あり。メンバーが無理なく取り組めるよう配慮している。又、チームメンバーが行える活動を現実的に考えていただき、その意向が実現できるよう必要最低限の助言や調整役の役割を包括が担っている。
- ・包括へ依存される部分もまだ強いが、今後の活動を含め色々なことをメンバー同士で話し合い自主的に活動できるよう、会合には包括職員も参加し、話し合いの見守りや方向性を見失う時には助言を行っている。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

- ・活動当初の会合は包括の話しを受け身的に聞くことが多かったが会を重ねるごとにメンバー内で積極的に意見交換ができるようになっている。
- ・認知症カフェの定期開催により、地域住民にも集いの場として周知されてきており、少しずつ、新規の方も参加するようになっている。
- ・チームオレンジメンバーも参加者と積極的にコミュニケーションを取ることができるようになっている。

＜課題＞

- ・チームオレンジについて地域住民への周知活動を行う事。
- ・現段階でメンバーが4人と少ないため、認サポを定期的に行い、チームオレンジメンバーを増やしていく活動も必要。

6 チームのアピールポイント

主に認知症カフェに参加し、参加者の話し相手や茶話会のホスト役として活動しています。軽体操や昔遊び、ゲームやトランプなどの遊びを通し、参加者同士の交流を図ることや、町の読み聞かせボランティアなどの協力を得て、大人の読み聞かせの会も企画しました。町内の郷土館や美術館を認知症カフェの会場にするなど、町の関係機関とも連携し、地域住民・多世代が楽しく交流できるような場を提供しています。

7 今後の活動

- ・認知症カフェの手伝い
- ・認知症普及啓発活動にも参加し、「チームオレンジ」の周知やメンバー集めを行う予定、
- ・入所施設や通所事業所などを訪問し、認知症の方や高齢者の方の話し相手ボランティアなど

チームオレンジの取組（胆振総合振興局管内：事例①）

苫小牧市	
チーム名【	オレンジカフェあいか】
タイトル【	地域住民が運営する多世代交流型の認知症カフェ】

1 活動の概要

活動開始時期	令和7年4月（ベースとなる地域サロンは令和5年5月から活動しています。）
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☒ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☒ その他（NPO法人）
活動頻度	毎月第1・3・5木曜日の10時から12時まで ＊学童保育の場所を使用している都合上、小学校の春・夏・冬休みの期間は活動休止
参加費・利用料金	飲食代として300円
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☒ 市町村からの補助 ☒ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	・リーダー：元GHの管理者、元認知症ケアの経験のある介護支援専門員 ・認知症サポーターステップアップ講座を修了した地域サロンの参加者 ・民生委員、町内会役員 ・認知症当事者（MC Iを含む）と家族 ・NPO法人の代表
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

多世代交流サロンとして2年前から活動をしていた。メンバーの中に町内会役員、民生委員、ボランティアに興味がある住民が多く参加、メンバー同士のコミュニケーションも良好で関係性も良かった。認知症サポーター養成講座を全員受講した昨年夏頃から、認知症の方と家族が参加するようになった。経過の中で認知症の軽減効果を認めた。この事がきっかけとなり、既存
--

のサロンに認知症カフェの機能を合わせた運営をすることで、この地域の認知症支援の拠点となるのではないかと考え、チームオレンジを結成した。

3 活動内容

- ・口腔体操（飲食時の誤嚥予防 5 分）
- ・回想法を取り入れた座談会（飲食あり）と認知症相談会（100 分）
- ・歌とりズム体操（コグニサイズ 15 分）
- ・運営法人の認定こども園の園児との交流（園の都合による）



4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・自然体で本人や家族とかかわり、運営側も参加者と一緒に時間を楽しむことをモットーに運営している。
- ・活動終了後、本日の活動についての振り返りを行うことで、活動の充実を図っている。
- ・チームオレンジのメンバーには、オレンジ色のエプロンとバンダナを身に着けてもらい、温かい、話しやすい雰囲気を作っている。
- ・5～6名のグループ編成で、参加者が関係構築しやすい環境としている。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・参加者とチームメンバーの信頼関係が深まり、サロン外での活動も見られるようになってきた。
- ・このサロンの活動を聞いて、近所の方がボランティアとして参加してくれた。
- ・園児との交流で参加者の表情に笑顔が見られ、気持ちの高揚がみられた。

<課題>

- ・チームメンバーは70代前半が多く、今後のサロン継続に向けて、若い新規

メンバーの確保が必要。

- ・利用ができない期間の活動について（サロン外での活動場所の検討など）

6 チームのアピールポイント

- ・初めて参加した人も、リラックスして活動に参加ができる。
- ・園児たちとの交流がある。
- ・地域住民主体で運営しているため、地域住民が気軽に参加しやすい。

7 今後の活動

- ・地域包括支援センターや社会福祉協議会、町内会や民生委員などと連携しながら、地域の交流拠点としてのサロン活動を継続して行きたい。
- ・認知症の方の個別の生活課題（買い物同行や趣味活動の継続など）について、可能な範囲で協力できる体制を作っていきたい。
- ・認定こども園、他地域のサロンとの交流イベントなども企画していきたい

チームオレンジの取組（胆振総合振興局管内：事例②）

伊達市	
チーム名【あい彩(いろ)の会】	
タイトル【認知症の方の“やりたいこと”と“私でよければ”をつなげる会】	

1 活動の概要

活動開始時期	令和6年5月
活動実施主体	☒ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☐ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	2か月に1回程度
参加費・利用料金	無料
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☒ その他（市の事業費）
メンバー （チーム員）構成	認知症サポーター養成講座を受講した伊達市民
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☐ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☒ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

認知症サポーター養成講座を受講した方のうち、「自分にできる範囲でもう一歩踏み込んだ活動をしたい」という思いがある方が集まり、令和6年2月にステップアップ講座を受講。その後、どのような活動ができるかについてグループワークや話し合いを重ね、令和6年5月にボランティア団体としてチームオレンジだて「あい彩の会」が発足した。

3 活動内容

・個別サポート：認知症のある方のご自宅を訪問し、ご本人のやりたいことに一緒に取り組む。（例：おしゃべり、パズル、花壇の手入れなど） ・認知症カフェの運営サポート：認知症カフェの準備・片付け、来場者との交流などを行う。 ・認知症サポーター養成講座での朗読劇：認知症の方への対応方法の紹介として、ありがちな場面を朗読劇で再現し受講者の理解を促す。



- ・世界アルツハイマー月間における認知症に関する展示への協力
- ・ロバ隊長マスコット制作 など

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・市が主体であるため、サポーターが“やらされている感”を抱かないよう、サポーターの意見を大切にしながら進めている。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・個別サポートでは、関わっている認知症の方の意欲が向上したり、訪問しているサポーターも認知症の方から学ぶことがあったりと良い効果が生まれている。
- ・認知症サポーター養成講座での朗読劇を通して、小学生から高齢者まで幅広い層の市民に認知症やチームオレンジの活動について関心を持ってもらえる機会となっている。

<課題>

- ・認知症の方とつながることが難しく、本人発信の活動とはなっていない。個別サポートやデイサービス訪問を通して、認知症の方と信頼関係をつくり、本人の得意とすることや望んでいることを掬い上げていく必要がある。

6 チームのアピールポイント

- ・あい彩の会は和気あいあいとした雰囲気、認知症の方との関わりや普及啓発において、自分にできそうなことに楽しみながら取り組んでいる。
- ・「あい彩(いろ)の会」の名前の由来：あい＝伊達の特産品である藍・LOVEの愛・わたしの I、彩＝認知症があってもなくても自分色、彩り豊かな地域でありたいという思いが込められている。

7 今後の活動

- 課題である「本人とつながること」に少しずつ取り組んでいき、本人発信の取り組みにつなげていく予定。
- 地域包括支援センターが主催している認知症カフェの企画をあい彩の会が一部担い、市民目線のカフェを開催する計画を立てている。

チームオレンジの取組（胆振総合振興局管内：事例③）

白老町	
チーム名【	チームどんぐりカフェ】
タイトル【	認知症カフェを母体とする地域の居場所】

1 活動の概要

活動開始時期	R6. 1. 11
活動実施主体	☒ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☐ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	月 1 回
参加費・利用料金	1 回 1 0 0 円（お茶代）
運営財源	☒ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	地域住民、民生委員、町内会長等
チームオレンジの 類型	☐ 第 1 類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第 2 類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第 3 類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

認知症があっても、地域で生活ができるよう、地域住民同士で見守りや支援ができるより所を目指す
--

3 活動内容

認知症カフェを母体とした地域住民のチームチーム 地域の認知症当事者の把握、見守り見守り 当事者家族の交流の場

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

本人とのつながりを維持するため、相談ができる交流、傾聴、茶話会、季節のイベントを実施

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

固定の参加者がいる。カフェが認知されているので参加しやすい

<課題>

チームオレンジを増やす

カフェとチームオレンジのすみ分け

6 チームのアピールポイント

送迎があるので参加しやすい

7 今後の活動

本人とのつながりを維持するため、相談ができる交流、傾聴、茶話会、季節のイベントを実施

チームオレンジの取組（胆振総合振興局管内：事例④）

安平町	
チーム名【	】
タイトル【オレンジカフェ帰りのオレンジフラワープロジェクト】	

1 活動の概要

活動開始時期	令和7年5月
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☒ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☒ その他（プロジェクトは推進員が主体）
活動頻度	月1回（オレンジフラワーは6～9月）
参加費・利用料金	なし
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☒ その他（社協補助、社福法人からの菓子と飲み物の補助）
メンバー （チーム員）構成	・代表～認知症サポーターの会会長 ・認知症サポーターステップアップ講座修了者 ・認知症当事者 ・認知症地域支援推進員、地域包括支援センター（下記はオレンジフラワー参加者） ・認知症サポーターの会会員 ・家族、施設スタッフ、近所の方 ・民生委員
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

・令和6年4月に、前年度ステップアップ講座を受講済みの認知症サポーターの会会員さんで、既存拠点（オレンジカフェ）活用タイプとしてチームオレンジを立ち上げ。 ・「グループホームに入居したが、以前のように外出する機会がない」との声を受けて、グループホーム入居者のオレンジカフェ参加時に、メンバーの徒歩送迎を開始。

- ・入居者の方の「お友達が（施設に）遊びに来ることがない」との言葉とメンバーの「認知症の方と会う機会が少ない」言葉を受け、令和7年にオレンジフラワープロジェクトを企画。政策推進課の「花いっぱい運動」で花の苗を確保し、各自治会に依頼し令和7年6月にオレンジ色のプランターを各グループホームに設置。
- ・令和7年6月～月1回、オレンジカフェの後に参加した認知症当事者を送りつつ、施設のプランターや周辺の草取りを、他の入所者やスタッフたちと交流しながら行っている。

3 活動内容



※作業が身体的にできない方も車椅子で外に出てきてくれることもある。

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・熱中症予防や負担感軽減の意味も含め活動時間は30分に限定
- ・施設にお願いしているのは“トイレを借りる”ことだけにしている。しかし、作業後に入所者の皆さんと参加者とのお茶飲みの時間を用意してくれたり、交通機関を待つ間に施設内で過ごさせてくれている。
- ・参加しやすいように、オレンジカフェ会場とグループホームの距離が近い地区では、同日カフェ直後に実施としている。送りながら遊びに行くイメージで実施している。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・花の確保のためにグループホームのある自治会に調整したところ、どこも快く協力してくれ、プランターへの花の植え付けから運搬、設置までを自治会の皆さんで協力してくれた。
- ・自治会役員からも、施設入所者と交流機会がないとの声を受け、自治会行事などについて施設に参加声かけも開始。

・コロナ禍もあり会える機会がなかったそうで、参加者と入居者が久しぶりの再会を喜びあっている様子がみられた。

<課題>

・オレンジカフェ、サポーターの会総会、民生委員協議会で事業周知したものの、参加者が少ないこと。

6 チームのアピールポイント

・送迎は2年目、オレンジフラワーはまだ1年目のため、評価を細かく実施し、その都度検討しながら活動の継続や拡大を検討していきたい。

7 今後の活動

・在宅や施設の認知症の方たちや家族、支援者から出てきた希望を大切に、活動に結び付けていきたい。

チームオレンジの取組（胆振総合振興局管内：事例⑤）

むかわ町	
チーム名【オレンジカフェピース】	
タイトル【認知症の方やご家族、地域の方などが気軽に参加できる居場所】	

1 活動の概要

活動開始時期	令和6年9月5日
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☐ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☒ その他（特別養護老人ホーム）
活動頻度	2ヶ月に1回。奇数月の金曜日。14：00～
参加費・利用料金	18歳以上：100円 18歳未満：無料
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☒ その他（特別養護老人ホーム）
メンバー （チーム員）構成	・特別養護老人ホーム職員 （現在9名）
チームオレンジの 類型	☒ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☐ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

・むかわ町のオレンジカフェが少なかった。 ・認知症サポーター養成講座やキッズサポーター養成講座の開催は行っているが、活動がそこで止まっていたので立ち上げた。 ・もっと当事者の方や当事者家族の話を身近で聞きたかった。

3 活動内容

・前半：生活に役立つ情報 ・後半：参加者同士の交流会（話など）
--



4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・皆さんが参加したいと思うような演出を行う。
(話して頂く方の選出や身近で気になるような情報の提供)
- ・話して頂く方は福祉関係者だけでなく、色々な分野の方に話して頂く。
- ・参加して頂いた方が参加しやすいと思うような環境作り。
- ・施設の SNS を活用。(インスタグラム)
- ・社会福祉協議会の広報誌に掲載して頂いている。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・回数を重ねるごとに参加者の定着が見えてきた。
- ・地域で認知症について考えてくれる方が多くなってきた。

<課題>

- ・発足したばかりなので、知名度がない。
今後は SNS やチラシなどで周知していく。

6 チームのアピールポイント

- ・参加した方が「また参加したい」と思ってもらえる活動を心掛けている。
- ・地域の方と介護施設が身近な存在になってもらえるような活動。
- ・オレンジカフェの時間の時だけは笑顔になれる活動。

7 今後の活動

- ・現在のオレンジカフェが確立していけば、現在行っているスタイルにプラス専門性を重視したカフェを考えていく。
- ・今以上に活動に工夫をしていき、共生社会に近づける活動。

チームオレンジの取組（胆振総合振興局管内：事例⑥）

むかわ町	
チーム名【	ほべつカフェ】
タイトル【	知り合いが多く気軽に参加しやすいカフェ】

1 活動の概要

活動開始時期	令和5年5月
活動実施主体	☒ 市町村 ☒ 地域包括支援センター ☐ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	2ヶ月に1回 水曜日 14:00～15:30
参加費・利用料金	無料
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☒ その他（町の予算、ボランティアからの提供）
メンバー （チーム員）構成	・認知症当事者や家族 ・介護サービス事業所の利用者や入居者等 ・地域包括支援センター職員（町職員） ・社会福祉協議会（生活支援コーディネーター・ボランティアコーディネーター） ・介護施設職員 ・ボランティア（認知症サポーターやその他）
チームオレンジの 類型	☒ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☐ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

・令和4年8月にチームオレンジコーディネーターを中心に準備会を行い鶴川地区・穂別地区それぞれの活動拠点の立ち上げを目指す。 ・穂別地区では令和5年5月から市街地の中心にあるサテライトオフィス（ホコスタ）を会場に認知症の当事者に限定せず様々な方に参加してもらう様、ケアマネ等からお誘いしながら集いを開始。 ・参加者は徒歩で参加することが困難で課題があった。町主催事業であることから移送サービスを利用可能とすることで参加者が継続的に参加できている状況。
--

- ・令和6年8月からサテライトオフィスが使用できなくなり会場変更。ふれあい健康センター事務所を会場とする。
- ・令和6年10月から、カフェでの勤務経験を活かしてコーヒー等を提供したいという新たなボランティアの参加がある。令和7年5月から会場を町内の介護事業所（デイサービス・ケアハウス）に変更。ケアハウス入居者、特養入所者や町内のGH入居者も参加する様になり、参加者が増加。認知症の夫と介護者の妻が数組参加しており交流の機会になっている。

3 活動内容

飲料の提供、交流、その他

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・関係機関、ボランティアとの連携
- ・和やかに交流できる雰囲気づくり、会話のきっかけづくり等

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・閉じこもりがちな高齢者の交流の場になっている。
- ・認知症の当事者の家族が同じ様な境遇の方と交流できる場になっている。

<課題>

- ・認知症サポーターが中心となった活動にはなっていない。
- ・ボランティアの人員不足。ボランティアの思いによって活動の目的がズレない様配慮が必要。
- ・チームオレンジの活動を主体的実施したいという団体の動きはなく、町主催（地域包括支援センター）の事業としている状況。その為参加費は無料としていたり、移送サービスが利用できているが町主催ではなくなるとその様な体制を維持していくことは困難。

6 チームのアピールポイント

- ・人口 2000 人程度の地域なので、参加者同士も知り合いが多い。関係者、ボランティアも顔なじみが多く気軽に参加しやすい雰囲気。

7 今後の活動

- ・会場の変更により参加者層に変化が見られている。地域の方が参加しやすい様、新たに整備されたまちなか交流拠点に会場を変更するか検討していく。
- ・ボランティアが参加しやすい日時の設定を検討する。
- ・R7 年度実施予定の認知症サポーター養成講座やステップアップ研修の受講者を効果的にほべつカフェの活動に参加してもらう様働きかけていく。

チームオレンジの取組（胆振総合振興局管内：事例⑦）

むかわ町	
チーム名【	みんなの茶店】
タイトル【	認知症当事者や家族が交流し相談できるサロン】

1 活動の概要

活動開始時期	令和5年4月
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☒ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	毎週水曜日 10：00～14：30 第4日曜日 12：00～14：00
参加費・利用料金	100円
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☒ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	ステップアップ研修修了者 ・保健師 ・介護事業所職員 ・認知症の方の家族 ・社会福祉協議会 ・地域包括支援センター（行政） 等
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

・元々、サロンメンバーから「相談しやすい場所・環境が必要」という声もあり、既存の交流サロンメンバーに行政からステップアップ研修受講の声かけをおこない、チームオレンジの立ち上げとなる。
--

3 活動内容

・自由交流 ・介護や健康に関する相談（フリー保健師が対応）
--

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・認知症と限らずいろんな方が誰でも参加しやすいよう、自由に活動・参加できる場所づくり
- ・その人に合った活動ができるよう工夫

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

チームメンバーにはフリー保健師や介護事業所職員もボランティアとして参加しており、「公的なところへは相談へ行きづらいが、みんなの茶店へは相談しやすく、ちょっとした相談ができるようになった。」という参加者の声あり。

<課題>

- ・周知不足により、町民にあまり知られておらず、来る方も毎回ほとんど同じで限られている。

6 チームのアピールポイント

- ・駅で実施しているため、JRの待ち時間や降りて興味を持った方でも参加しやすい。

7 今後の活動

- ・社会福祉協議会で周知ポスター作成
- ・デイサービス等には行きたくない方や認知症当事者等が参加者として少しでも増えてもらいたいため声かけ等。
- ・少人数でも相談や交流がしやすい場所にしていく。



チームオレンジの取組（日高振興局管内：事例①）

日高町	
チーム名【	もんちゃんの家】
タイトル【	】

1 活動の概要

活動開始時期	令和5年10月
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☒ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	毎日
参加費・利用料金	昼食代300円、コーヒー代100円
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☒ 市町村からの補助 ☒ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	会員、認知症地域支援員、保健師、生活支援コーディネーター
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

交流の拠点「もんちゃんの家」で行われていたサロン活動へ居場所として認知症の方や閉じこもり高齢者を包括等でつなげてきた。年齢問わず利用できる柔軟な活動が行われており、メンバー自身が介護予防や認知症予防に意識が高い。互いに見守り、包括への相談の勧めなどの機能も担っており、チームオレンジとして機能していたため登録へ至る。

3 活動内容

もんちゃんの家カフェ「寄り拠」月曜～日曜10:00～15:00
 昼食会、手工芸、健康麻雀、カラオケなど、曜日によって活動
 フリーマーケットなどのイベントも開催。駐在や消防も出入りする。
 障がい者、認知症高齢者の参加を受入れ、共に活動を行っている。

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

参加に配慮が必要な方は、包括やケアマネも介入し、継続利用やトラブル回避を図っている

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

<課題>

6 チームのアピールポイント

7 今後の活動

現状の活動の継続

チームオレンジとしてではなく、サロン活動や交流の拠点としての周知していく方向

チームオレンジの取組（日高振興局管内：事例②）

平取町	
チーム名【	】
タイトル【	認知症の当事者や家族が参加する認知症カフェ】

1 活動の概要

活動開始時期	令和6年4月 ※認知症カフェ事業自体は平成28年度から実施
活動実施主体	☐ 市町村 ☒ 地域包括支援センター ☐ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	毎月第3水曜日 14:30～15:30
参加費・利用料金	無料
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☒ その他（拠点となる認知症カフェは市町村補助）
メンバー （チーム員）構成	代表：包括職員（チームオレンジコーディネーター） ・キャラバン・メイト（ステップアップ研修受講者含む） ・認知症当事者と家族 ・包括職員
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

・認知症の夫を介護する妻から、デイサービス利用への拒否が強く、妻以外との関りが少ない状況で、どうしたら良いか相談があったことがきっかけ。 ・本人は話し好きだが、妻がいない状況で一人で外出する事を拒否するため、夫婦で参加可能な認知症カフェに通う事で、妻以外の人との会話や関係を楽しむ経験を積み、将来的にはデイサービス利用に繋げるために活動を開始しました。 ・当初は妻の隣から離れる事ができなかったが、回数を重ねる事で離れた場所でメンバーと話をしたり、メンバーと近くを散歩する事が出来るようになり、現在はデイサービス利用と併用している。
--

3 活動内容

- ・茶話会（昔の写真や、本人の関心が高い出来事と話題とする）
- ・公園等の散歩

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・認知症当事者の夫、介護者の妻、それぞれの思いを聞取り、介護ストレスの軽減が図られるように、全員で過ごす時間やそれぞれを分けて過ごせる時間を設けている。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・顔馴染みの関係づくりや、居心地が良いと思える環境づくりを図る事で、周囲との人間関係が希薄だった夫婦が、他者と繋がれる場所・関係を持つ事ができた。

<課題>

- ・活動拠点としている認知症カフェは送迎機能がなく、認知症当事者や家族が自分たちで会場まで行く必要がある。そのため、高齢の認知症当事者や会場から遠い地区の参加者が参加しにくい。

6 チームのアピールポイント

- ・屋内での茶話会を中心に活動していたが、地域の公園や景色が良い場所での散歩、新たにできた飲食店を訪れるなど、屋外での活動も取入れる事で、参加者の興味や関心を高め、参加継続に繋がっています。

7 今後の活動

- ・認知症当事者や家族の希望（やりたい事、楽しみたい事など）を聞取りながら、実行可能なものを参加者全員で楽しめる活動を継続する。

チームオレンジの取組（日高振興局管内：事例③）

浦河町	
チーム名【の～んびりカフェ】	
タイトル【認知症当事者の方がスタッフとして活躍するカフェ】	

1 活動の概要

活動開始時期	令和元年 5 月
活動実施主体	☐ 市町村 ☒ 地域包括支援センター ☐ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	月 1 回
参加費・利用料金	なし
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☒ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☒ その他（来客の食べ飲み代として 100 円）
メンバー （チーム員）構成	認知症当事者 認知症地域支援推進員 認知症サポーターステップアップ講座終了者 地域包括支援センターの保健師と主任ケアマネ
チームオレンジの 類型	☐ 第 1 類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第 2 類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第 3 類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

認知症だからといって全てのことができなくなるわけではなく、何かサービスと言っても、既存の介護サービスにはなじめない方も多かった。当事者の方のできることや得意な事を生かした取り組みをしたいと思い当事者がスタッフとして活躍できるカフェを立ち上げた。まちなか元気ステーション（多世代の地域交流の場）がオープンしてからオレンジカフェが定期開催されるようになり、の～んびりカフェも月 1 回開催中。当事者もお客さんも誰でも「の～んびりしていいね」の意味で現在の名前になった。

3 活動内容



月1回の～んびりカフェ開催中。食べ物＋飲み物100円として、誰でも参加OKのオレンジカフェです。毎月メニューは変わります。
上記は、カフェメニューの白玉団子、ドーナツづくりをしています。
百人一首の様子です。

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

認知症と診断されていても、どこにもつながり先がない（繋がれない）人に声をかけ、「カフェがオープンするのでスタッフとして手伝いにきてください」とそれぞれの方に役割があるということを意識してもらうようにしてい

ました。予定も忘れてしまうことが多く、前日に確認の電話や家族にもお知らせして、前もって段取りしています。作業中も、失敗を嫌がるのか「できない」「見てるだけでいい」といった雰囲気もありましたが、色々な作業の中でできることを見つけ、出来ることで楽しんでもらうことに気を付けています。また、一緒に作業するステップアップ講座終了後のサポーターにも当事者の「～ような症状があつて、～ことが好きで得意です。」ということを前もって情報共有したり、都度声掛けしてほしいことを伝え、チームで活動できるように配慮しています。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

短期記憶の低下から、毎回参加していても何をしたか忘れてしまっていることが多い中で、「なにをしたか覚えてないけども、あそこに行ったらなんだか楽しい。」と楽しかった記憶があり、それが継続して来てくれている理由になっているのではないかと思います。楽しんで来てくれることでの外出意欲の向上が見込まれます。

認知症になってから外出する機会を増やすのではなく、普段から気軽に行ける場所、繋がれる場所としての地域の交流の拠点となっています。

<課題>

ボランティアで来てくれている方も高齢化しています。「自分たちの介護予防」といって取り組んでくれています。今後、一緒に活動してくれる担い手不足が考えられます。

6 チームのアピールポイント

・認知症当時者のやりたいことやできることを大切にして、活動しています。カフェスタッフとして活動した後は、おやつを食べ、その後のんびりと百人一首に取り組んでいます。百人一首も「やりたい」の声から始まり、楽しみながら行っているため毎回盛り上がっています。いつの間にか、読み手の方も来てくれるようになり、参加メンバーも少しずつ札の読み方も覚えてきてます。

7 今後の活動

・認知症当事者が役割を持って活躍できることで、地域とつながることができる社会参加の場となっています。今後も地域の交流拠点として、カフェを活動を行っていきたいです。

チームオレンジの取組（日高振興局管内：事例④）

様似町	
チーム名【	】
タイトル【認知症があってもなくても、気軽に集まり活躍できる居場所】	

1 活動の概要

活動開始時期	令和 6 年 4 月 (既存の拠点活動は令和 3 年 5 月から実施)
活動実施主体	☐ 市町村 ☒ 地域包括支援センター ☐ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他 ()
活動頻度	定例 (年 3 回) + 不定期 (随時)
参加費・利用料金	無料
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☒ その他 (町負担)
メンバー (チーム員) 構成	・認知症当事者を含む高齢者及びそのご家族 ・生活支援サポーター (認知症キャラバンメイト、サポーター含むボランティア) ・介護支援専門員 ・認知症地域支援推進員 (地域包括支援センター・チームオレンジコーディネーター・認知症初期集中支援チーム等々兼務) ・町管理栄養士
チームオレンジの 類型	☐ 第 1 類型 (共生志向の標準タイプ) ☒ 第 2 類型 (既存拠点活用タイプ) ☐ 第 3 類型 (拠点を設置しない個別支援型タイプ) ☐ その他 ()

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

・認知症カフェを開催しても、認知症当事者やそのご家族の参加が無く、メンバーの固定化などの課題が生じていた。 ・認知症当事者の希望に基づく事業内容へと見直しを行うべく、地域の介護支援専門員等の協力を得て、認知症当事者の要望を確認。 ・結果、「土いじり（家庭菜園）」、「おしゃべり」、「食べること」が上位であったことから、令和 3 年度より菜園活動と食事会を開始。
--

- ・活動内容が、チームオレンジの趣旨と合致することから、チームオレンジに位置付け活動を継続している。

3 活動内容

- ・毎年春先にボランティアを交えて活動方針、内容を決定。
- ＜菜園活動＞
- ・例年5月に畑おこし、種撒き、苗植えを実施。その後は随時水やりや除草作業等を行い、9月に収穫祭を実施。
- ＜食事会＞
- ・9～10月に収穫した野菜を使用して、食事会を開催。
 - ・会場では、菜園活動中に撮影した写真をスライドショーで上映。
 - また、参加者に趣味のバイオリン演奏を披露していただいている。

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・参加者に認知症の有無は問わず、活動時も支援する側・される側に分類されないことを念頭に置いて実施。
- ・参加者それぞれの意向を確認のうえ、得意なこと、できそうなことに携わっていただいている。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

- ＜効果＞
- ・認知症当事者やそのご家族の参加が得られた。
 - ・認知症当事者を含む高齢者が、それぞれ行える範囲で活動され、生き生きとしたお姿と笑顔が見られている。
 - ・地域の専門職やボランティアが、高齢者の皆様からご指導・ご助力いただく場面が多々あり、和気あいあいとした雰囲気生まれている。
- ＜課題＞
- ・活動場所となる菜園が1か所のみで狭いこと、高齢者以外のメンバー数が限られること。このため活動頻度や参加者を無制限に増やせず、メンバーが固定化。
 - ・活動方針の打ち合わせ段階において、認知症当事者やそのご家族の参加を得られていない。
 - ・行政主導（地域包括支援センター職員）による直接実施から、民間活動への移行。
 - ・高齢者以外のチーム員が活動主体になってしまう場面もある為、活動の目

的と方針にブレが生じないよう、常に意識しながら活動する必要がある。

6 チームのアピールポイント

- ・地域の社会資源が極端に少ない地域において、認知症があっても無くても気軽に楽しく活躍できる貴重な居場所となっている。

7 今後の活動

- ・現体制では解決が難しい課題はあるものの、活動の目的を忘れず、ゆるく長く活動を続けていきたい。

チームオレンジの取組（日高振興局管内：事例⑤）

新ひだか町	
チーム名【川合・西川ふれあいカフェ】	
タイトル【認知症当事者の方が参加する地域の集いの場】	

1 活動の概要

活動開始時期	令和6年11月 (※集いの場としては令和4年5月から開始)
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☒ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	毎週水曜日 11:00～13:00
参加費・利用料金	100円
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☒ 市町村からの補助 ☒ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー (チーム員) 構成	・認知症サポーターステップアップ講座修了者 ・認知症当事者、家族 ・地域住民
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

・地域で精力的に活動している集いの場の一つであり、毎回大勢の方が参加している。参加者の中には地域包括支援センターで関わっている認知症当事者やその家族も参加していた。 ・地域包括支援センター職員が講話に伺ったり、集いの場の代表者が現役のケアマネジャーであるため、集いの場参加者は介護のこと等で困ったことがあれば、すぐに相談できる環境であった。 ・このことからチームオレンジとしての活動を代表者に提案したところ快諾いただき、登録に向けた準備を進めていった。
--

3 活動内容

- ・ 昼食の提供（食事代として 100 円）
- ・ 体操
- ・ レクリエーション
- ・ 地域包括支援センターの講話（年に数回）

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・ 登録への準備を進めていくときに、集いの場運営者だけでなく、参加者全員に認知症サポーター養成講座、ステップアップ講座を受講していただき、認知症への理解を深めた。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・ 参加者の認知症への理解が向上したことで、認知症当事者やその家族が参加しやすい環境になっている。

<課題>

- ・ チーム（集いの場）の後継者がいない。

6 チームのアピールポイント

- ・ 食事やレクリエーションを通して参加者同士の交流が図られ、誰でも気軽に参加できる雰囲気となっている。代表者が様々な催しを企画してくれるため、みなさん楽しんで参加されている。

7 今後の活動

地域包括支援センターと連携し、今後も地域の交流拠点として集いの場活動を継続していく。

チームオレンジの取組（渡島総合振興局管内：事例①）

木古内町	
チーム名【木古内町チームオレンジ】	
タイトル【	】

1 活動の概要

活動開始時期	令和6年8月28日設置
活動実施主体	☒ 市町村 ☒ 地域包括支援センター ☐ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	年1回
参加費・利用料金	0円
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☒ その他（活動なし）
メンバー （チーム員）構成	19名
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

令和6年8月28日、認知症カフェ活動の延長上で、ステップアップ研修を開催し、「木古内町チームオレンジ」を設置。

3 活動内容

特設活動はなし。2ヶ月に1回の認知症カフェを主体に、年1回ステップアップ研修を開催し、認知症及びチームオレンジに関する研修会を開催しチーム員が参加する。
--

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

ステップアップ研修のみでの周知では参加者を集うのは難しく、認知症カフェの延長線上でステップアップ研修を開催。
--

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞活動なし

＜課題＞活動なし

6 チームのアピールポイント

特になし

7 今後の活動

年1回ステップアップ研修を継続し、普及啓発に努めると共に、チームオレンジ単独での認知症カフェを目指す。

チームオレンジの取組（渡島総合振興局管内：事例②）

七飯町	
チーム名【カフェふまねっと】	
タイトル【認知症の家族が運営する活動団体】	

1 活動の概要

活動開始時期	令和5年10月
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☒ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	月1～2回程度
参加費・利用料金	無料
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☒ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	・認知症サポーターステップアップ講座修了者 ・認知症サポーター ・認知症の家族
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

・北海道の介護者の会の道南支部として活動しており、そこから認知症の家族会として発足。介護予防活動としてふまねっとを行いながら、認知症家族の悩みや不安などを語り合える場となっている。福祉課や知人の紹介等で相談に来られる方もいる。
--

3 活動内容

・ふまねっとの実施 ・茶話会 ・認知症介護、在宅介護の相談

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

参加している人、来てくれた人が楽しく感じてもらえたり、気分転換になるような雰囲気づくりを心掛けている。参加は誰もが気軽に集えるように見学や茶話会のみの参加も可能。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

参加者の介護予防や認知症介護における家族の語り合いの場となっている。

＜課題＞

会員が高齢になってきていること。なかなか若い人たちが増えていかないこと。周知の方法についても検討していきたい。

6 チームのアピールポイント

在宅介護や認知症介護の経験のある会員が所属していることから、認知症家族の悩みにも寄り添うことができる。一見、認知症とわからない場合、その家族の辛さや悩みを周囲に理解してもらいにくく、その人が認知症であることを話したときに自分が悪者のようにみられてしまう感じがしたりと、家族は悩みを抱え込んでしまうことが多い。本人との関わり、周囲との関わりを踏まえながら、話を聞いたり、アドバイスできることがあればしていき、今後の参考にしてもらいたい。

7 今後の活動

これからも楽しみながら活動を続けていきたい。ふまねっとの他にもモルックも取り入れながら、集まることに飽きない工夫を考えていきたい。

チームオレンジの取組（渡島総合振興局管内：事例③）

七飯町
チーム名【市民後見人の会ななえ】
タイトル【町内のボランティア団体】

1 活動の概要

活動開始時期	令和 7 年 2 月
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☒ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	月 1 回
参加費・利用料金	会費制
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☒ 市町村からの補助 ☒ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	・ 認知症サポーターステップアップ講座受講修了者 ・ 認知症サポーター ・ 市民後見人養成研修修了者 ・
チームオレンジの 類型	☐ 第 1 類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第 2 類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第 3 類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

市民後見人の会として平成 28 年に発足。成年後見制度の普及啓発、市民後見人として活動。令和 5 年に認知症サポーター養成講座、令和 7 年に認知症サポーターステップアップ講座を受講。
--

3 活動内容

・ 市民後見人活動 ・ 成年後見制度の普及啓発 ・ 研修会の開催
--

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

支援をする本人、家族にも認知症を患い、ご自身で思いをうまく伝えられない方も多くいるので、その方々の権利を守り、意志を尊重しながら関わりを持っている。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

ご自身で判断、意思決定できない方の代弁者として、その方の権利を守ることができている。

＜課題＞

成年後見制度や後見人等の役割等の理解が浸透していない部分も多くある。

6 チームのアピールポイント

会員の中にはさまざまな職種の方が在籍しているため、必要な制度や機関へつなげることができます。

7 今後の活動

今後も市民後見人活動を通じて、認知症の方や高齢者の方の権利を守りながら必要な支援をしていきたい。

チームオレンジの取組（渡島総合振興局管内：事例④）

七飯町
チーム名【七飯町社会福祉協議会】
タイトル【町内の社会福祉協議会】

1 活動の概要

活動開始時期	令和7年2月
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☐ 住民・ボランティア ☒ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	月1回
参加費・利用料金	会費制
運営財源	☒ 市町村からの委託 ☒ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	・認知症サポーターステップアップ講座受講修了者 ・認知症サポーター ・社会福祉協議会職員 ・生活支援コーディネーター ・認知症地域支援推進員
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

七飯町社会福祉協議会は、任意団体として昭和26年に発足して以来、地域の方々や関係機関及び福祉団体の協力、連携のもと、様々な事業を展開。平成元年に法人化となり、組織を充実強化し「いくつになっても安心して暮らせるまちななえ」をめざし、福祉活動を展開。 令和6年に認知症サポーター、令和7年に認知症サポーターステップアップ講座を修了。
--

3 活動内容

町民の困りごととボランティア会員のマッチング。

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

利用者が認知症を患っている場合、本人に関わっている関係者がいれば密に連絡を取り合って情報共有している。ボランティアを依頼した日を忘れてしまうこともあるため、カレンダーに記入する等の工夫を行っている。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

認知症に限らず、依頼日を忘れることなどは少ない。

＜課題＞

困りごとの需要は増えているが、ボランティアがなかなか増えないので、一人の負担が増えてしまっている。

6 チームのアピールポイント

ボランティア登録をしている方には認知症サポーター養成講座等の受講を進めたりと、認知症の理解に努めている。

7 今後の活動

認知症と共に暮らしていけるまちづくりをしていきたい。

チームオレンジの取組（檜山振興局管内：事例①）

せたな町	
チーム名【チームオレンジせたな】	
タイトル【認知症を学びながらの活動	】

1 活動の概要

活動開始時期	令和6年7月
活動実施主体	☐ 市町村 ☒ 地域包括支援センター ☐ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	・グループホーム、地域密着型小規模多機能型居宅介護支援事業所へ月1回程度訪問し話し相手やデイサービスの手伝いなどを行い、施設で対応の仕方を学びながら活動をしている。 ・地域包括支援センター主催の認知症映画会を年1回開催しているため、会場の後片付け。 ・今年度より認知症カフェ年3回実施予定。 ・町主催の健康づくりの事業に参加年1回。
参加費・利用料金	参加費・利用料金は無料。
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☒ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	・認知症サポーターステップアップ講座修了者
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☐ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☒ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

- ・令和5年地域包括支援センターの会議にて内容を検討し、グループホームなどの施設に話し相手で訪問し、認知症の勉強を兼ねて訪問しながら、ニーズが出てきたら個人宅の訪問へと繋げて行くことにした。
- ・チームオレンジコーディネーターが、チームオレンジとして出来ることを考え地域包括支援センター主催の認知症映画会の後片付けを、チームオレンジメン

バーに提案し、行った。

- ・チームオレンジのメンバーから、認知症カフェの立ち上げの希望が出た。
- ・チームオレンジコーディネーターが、町主催の事業に参加する事を提案しチームオレンジ会議にて話し合い参加した。

3 活動内容

町主催の健康づくり事業への参加



4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・初めから個人宅への訪問や認知症カフェの立ち上げは、ハードルが高いと感じたため2～3人のチーム員で認知症の対応を学びながらボランティアでグループホームなどへ訪問していくこととした。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・訪問時、一緒に歌を歌ったり、ゲームをしたり、行事の手伝いをし、チームオレンジのメンバーも楽しんで活動出来ている。

<課題>

- ・新規メンバーの募集や、現在のメンバーの継続。
- ・今後の活動内容や活動資金。
- ・メンバーの中からのリーダーの育て方。

6 チームのアピールポイント

認知症の勉強を兼ねながらのチームオレンジとしての活動を行っている。

7 今後の活動

地域包括支援センターなどと連携し、家族や本人のニーズを活動に繋げて行きたい。

チームオレンジの取組（上川総合振興局管内：事例①）

名寄市	
チーム名【	チームオレンジ楓】
タイトル【	認知症カフェのボランティアスタッフ、地域でのレクリエーション活動】

1 活動の概要

活動開始時期	令和4年12月
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☒ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	月1～2回
参加費・利用料金	なし
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☒ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	認知症サポーター 認知症の方の家族
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

チームオレンジを結成するにあたり、市で育成していた「介護予防サポーター」と「認知症サポーターの会」の2つのサポーターの活動目的が、「介護予防の促進」と「認知症の方、その家族の支援」と共通していたことから、令和4年に両団体と協議し、会を統合してチームオレンジを立ち上げた。
--

3 活動内容

・認知症カフェのボランティアスタッフ ・高齢者施設、町内会でのレクリエーション活動 ・地域における見守りや相談先の紹介など

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・認知症カフェ終了後に、定期的なミーティングを開催している。ミーティング内容としては、地域での見守り活動における対応の相談や、レクリエーション活動の準備・打ち合わせなど。
- ・チーム員からの要望をできる限り吸い上げ、活動として実現できるようにミーティングを重ねている。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・認知症カフェの参加数が増加している。
- ・町内会、高齢者施設の理解が広まり活動の場が増えてきている。

<課題>

- ・会員数が伸び悩んでいる。
- ・活動メンバーの高齢化、固定化がみられている。

6 チームのアピールポイント

- ・レクリエーション・広報活動などの様々な活動において、メンバーひとりひとりが意見を出し合い、活動を作り上げている。
- ・「主体性」を大切にチームオレンジ活動のコーディネートを行っている。

7 今後の活動

- ・郊外での出張カフェの開催
- ・先進地視察を行い、認知症本人の望む活動を支援する活動体制や認知症本人・家族の居場所づくりとなる活動について学びを深めていく。
- ・名寄市立大学の学生と連携し、活動メンバーの高齢化を解消し、より活発な活動ができるような活動方針について検討している。



チームオレンジの取組（上川総合振興局管内：事例②）

富良野市	
チーム名【	富良野の和】
タイトル【	地域福祉サークル】

1 活動の概要

活動開始時期	令和6年4月（※サークルは以前より活動している）
活動実施主体	☐ 市町村 ☒ 地域包括支援センター ☐ 住民・ボランティア ☒ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	5月・8月・11月・2月 第3火曜日 9:30～11:00
参加費・利用料金	無料
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	・社協職員（リーダー） ・地域福祉サークル【富良野の和】参加者 ・地域包括支援センター職員（コーディネーター）
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

・令和5年度から立ち上げの準備を開始。 ・既存の社協福祉サークル【富良野の和】は、社会福祉協議会で開催している月1回のサークルで、サロンスタッフ等の集いの場としても機能しており、学びやレクリエーション等、活動そのものがチームオレンジと近いいため、チームオレンジ活動を行うことについてサークルメンバーに提案し、承諾をいただく。 ・令和6年度の活動に向け、令和6年2月に認知症サポーターステップアップ講座を実施。 ・令和6年4月からチームオレンジ【富良野の和】として活動開始。 ・毎月活動しているサークル活動の内、3か月に1回程度をチームオレンジの活動月とし、令和6年度中に3回、地域包括支援センター（認知症地域
--

支援推進員) が認知症の理解にむけた講話や事例検討等を開催した。令和7年度も同様に開催予定。

3 活動内容

- ・社協職員をチームリーダーとし、頭と体の体操等のレクリエーションや、学習会を実施。
- ・3ヵ月に1度、認知症関連の講話を実施。事例検討や認知症の寸劇も実施している。

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ・既存の活動を継続していきながら、メンバーが認知症の理解を深め、地域で心配な高齢者への支援や見守りに繋げて行きたい。
- ・地域のサロンスタッフも多く、認知症等が原因で集いの場に参加できなくなってきた当事者を支え合いながら参加を促すことができる活動に繋げたい。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・チーム員の認知症に関する知識を深めることができ、地域サロン等の個々のチーム員の活動の場で活かしている。
- ・地域包括支援センターの普及啓発にもなり、相談窓口へ繋がっている。

<課題>

- ・現状では、はっきりとした認知症当事者である方の参加はないが、今後メンバー内で心配な方がいたり、地域で認知症当事者の方がいた場合に、認知症になっても参加を続けられる場として活動を行いたい。

6 チームのアピールポイント

- ・チーム員は、ボランティア等で活動している方が多く、熱心に認知症について学んでいる。
- ・地域で様々な活動に取り組んでいる参加者も多く、他の集りや活動の場においても、新しい認知症観を広めていければ良い。

7 今後の活動

- ・認知症の方の参加に向けて、どのようなPRや活動が良いか検討中。
- ・認知症の理解と併せて、健康教育やフレイル予防等、複合的な取り組みを継続していく。

チームオレンジの取組（上川総合振興局管内：事例③）

愛別町
チーム名【チームオレンジあいべつ】
タイトル【なかよしカフェ～オレンジ～の取組みについて】

1 活動の概要

活動開始時期	令和4年1月 ※カフェは令和4年6月から開催しています
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☒ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	なかよしカフェ～オレンジ～ 月1回 第2月曜日 13:30～15:30
参加費・利用料金	無料
運営財源	☐ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☒ その他（包括が事務局として必要な費用を介護保険会計より支出）
メンバー （チーム員）構成	・原則、認知症サポーターステップアップ講座修了者 ・講座修了者の中に、民生委員やふまねっとサポーターなどを担っている方や認知機能低下が認められる方がいる
チームオレンジの 類型	☐ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☒ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

①要介護認定原因疾患やアンケート結果、KDB、相談件数等から把握し、認知症施策の推進は町の健康課題として重要であることを担当者間で共有 ②H21～24にもともと認知症サポーター養成講座は実施していたが、やりっぱなしになっていて活用できていない現状があることを認識 ③地域では、まだまだ偏見がある現状。認知機能低下により地域のサロンに誘われなくなったり、介護予防教室に来なくなったりする人がおり、そのような人たちをそのまま見過ごすことはできないと感じた。 ④これからも認知症の方が増えていく現状があり、行政や包括だけでやって

いけるわけがない…と考えた。

⑤ ①～④をふまえ「認知症の方の居場所づくりが必要」「サポーターを地域の資源として活用できたらよいのでは」となり、チームオレンジの立ち上げに着手した。

R1.8 認知症サポーター養成講座開催

R1.11 ステップアップ講座開催

- ・講話の中に「我が町の認知症の現状」を入れる
- ・はじめて「チームオレンジ」について触れる

R2 年度 チームオレンジコーディネーター研修受講

(包括職員と介護保険係職員)

R2.11 認知症サポーター養成講座開催

R3.2 ステップアップ講座開催

- ・「地域の皆さんがチーム員として、認知症に関する事業に携わってほしい」ことを伝える

R3.8 認知症サポーター養成講座開催

R3.11 ステップアップ講座開催

- ・チームオレンジとして活動いただける方を前提として講座受講者を募集
- ・チームオレンジの必要性や立ち上げまでの流れを講座の中で説明し意識づけ⇒講座終了後にチーム員としての活動意志確認のためのアンケート実施

R4.1 第1回チーム員ミーティング開催

R4.4 第2回チーム員ミーティング開催

R4.5 第3回チーム員ミーティング開催

R4.6～ なかよしカフェ～オレンジ～ 定期開催

3 活動内容

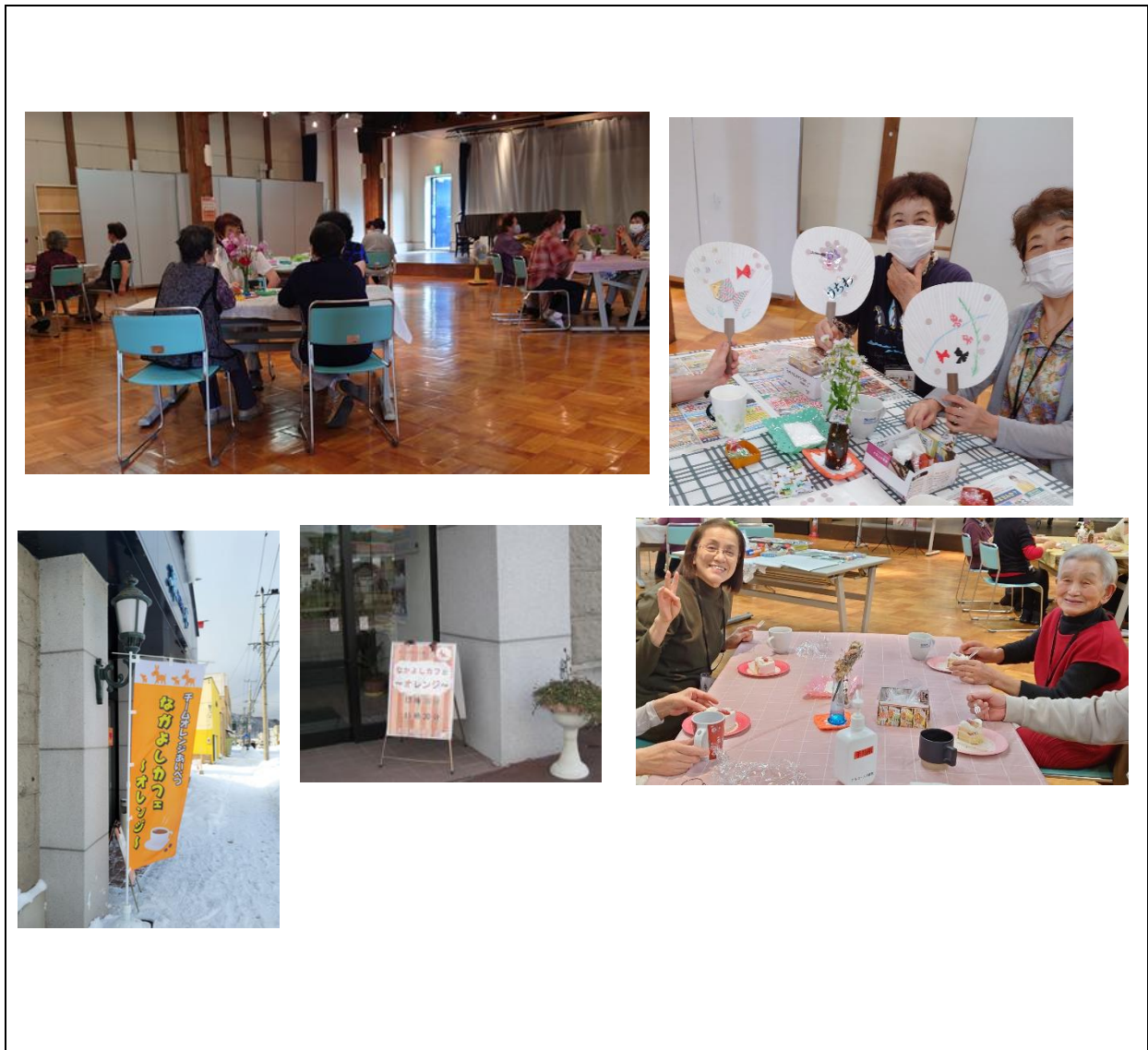
なかよしカフェ～オレンジ～

◆日時 毎月第2月曜日 13:30～15:30

◆会場 町の中心部にある蔵を改装した商業施設

◆内容 「簡単体操の日」「お楽しみの日」「ものづくりの日」「レクリエーションの日」と、おおざっぱなメニューのみ決めておく。メニューへの参加は自由としている。

◆チーム員活動は1回1ポイントのボランティアポイントの対象



4 活動を進めていく上での工夫・配慮

- ①立ち上げ前の段階から、この活動の主体は「チーム員」であることの意識づけを行う
- ②チームオレンジの必要性をコーディネーターとチーム員が常に共有する
- ③やらされ感、義務感を生まないように、活動内容を一緒に考える。また当番は決めず、カフェ開催当日に都合がつくチーム員が参加するスタイル。
- ④チーム員が対応などで困ったことや気づいたことを全員で共有し、助言し合ったり、支えあえる関係づくり➡良かったと感じたことを伝え合う
- ⑤チーム員自体も活動を楽しめること
- ⑥カフェの中では噂話や悪口は禁止というルールを徹底する

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

<効果>

- ・地域サロンや老人クラブなど他の活動に参加されなくなった方がカフェにつながり続けることができおり、認知機能の低下した方の居場所として認識してもらうことができている。
- ・カフェで知り合った参加者とチーム員が、カフェ以外の場所（町内のお店など）で会った時にも、気軽に声をかけあう関係づくりができている。
- ・チーム員自身もカフェの活動を楽しんでいる。受け身ではなく自らの活動としての認識があり、当日飾る花や季節の飾りつけを持ち寄ったり、カフェに参加したらどうかな？と思う人について包括に相談してくれたりする。
- ・チーム員の中には、認知機能低下が認められる方もおり、配慮することもあったが、現在は新しく入ったチーム員が戸惑っていると声をかけてくれたり、場を和ませてくれるなどの役割を持って活動できている。

<課題>

【なかよしカフェ～オレンジ～の課題】

- ・街中の会場まで自分で来ることが難しい方がいる ➡ 参加していただける方法を模索中
- ・家族や地域の理解 ➡ 参加させることで認知症だと知られたくないとの意識が強い ➡ 参加者拡大のための周知方法を検討中

【チームオレンジあいべつとしての課題】

- ・チーム員の確保
- ・カフェ以外の活動をどのように広げていくか
※高齢者見守り活動事業とコラボし、個別の見守り協力員としての登録をいただき、活動を広げる取り組みを進めている

6 チームのアピールポイント

- ・月1回のカフェでは、のんびりとお話をしたり、その日のプログラムに参加したり、チーム員も参加者と一緒に楽しみながら活動しています。桜の季節には桜並木の道を散歩したり、クリスマスにはコーラスグループを招くなど、季節に合わせた活動も企画しています。
- ・これまであまり話したことがなかったチーム員同士や、チーム員と参加者が顔見知りになり、カフェ以外の街中で会っても「元気？」と気軽に声をかけあえる関係づくりができ、認知機能が低下しても人とのつながりを感じられる地域づくり活動の1つとなっています。

7 今後の活動

- ・街中の会場での開催では参加が難しい地区にお住いの方が参加できるよう、令和7年度は試験的に、中心街から最も離れた地区の公民館でカフェを開催してみることとなり、現在準備を進めている。
- ・チーム員に、高齢者見守り活動事業の中の個別の見守り協力員登録をいただき、見守りを希望する方とのマッチングを通して、個別の見守り活動への展開を図っている。個別の見守り活動事業利用者に対して、日にちを忘れてしまう場合には、カフェの開催日の声かけや会場まで一緒に歩いて来るなどの活動も実施している。

チームオレンジの取組（上川総合振興局管内：事例④）

南富良野町	
チーム名【	チームオレンジ・わっはっは】
タイトル【	認知症当事者のやりたいことをするオレンジカフェ】

1 活動の概要

活動開始時期	令和3年4月
活動実施主体	☐ 市町村 ☐ 地域包括支援センター ☒ 住民・ボランティア ☐ 社会福祉協議会 ☐ その他（ ）
活動頻度	月1回
参加費・利用料金	・基本無料。 ・カフェや食事に行く時は別途料金が発生。
運営財源	☒ 市町村からの委託 ☐ 市町村からの補助 ☐ 会費・参加費 ☐ その他（ ）
メンバー （チーム員）構成	・認知症当事者 ・認知症サポーターステップアップ講座修了者 ・家族 ・地域住民 ・地域包括支援センター（認知症地域支援専門員）
チームオレンジの 類型	☒ 第1類型（共生志向の標準タイプ） ☐ 第2類型（既存拠点活用タイプ） ☐ 第3類型（拠点を設置しない個別支援型タイプ） ☐ その他（ ）

2 チームオレンジの結成・立ち上げの経緯・経過

・以前から町内では認知症サポーターの方が積極的にオレンジカフェに参加していた。当時、オレンジカフェの開催主体は「認知症本人と家族の会」で行っており、地域包括支援センターが会の支援をしていた。 ・認知症サポーターからの要請があり、ステップアップ講座を実施。 ・令和3年4月から既存の「認知症本人と家族の会」に上記講座を終えた認知症サポーターを加え、チームオレンジとして活動を開始している。 ・コロナ禍で活動が停滞した時期もあったが、現在は定期的にチームの活動が出来ている。
--

3 活動内容

・メインはオレンジカフェの実施。認知症当事者からやりたいことを聞き取り出来る限り活動に反映させている。

例) 「花を植えたい」「スイカを食べたい」「みんなで散歩をしたい」など



[その他]

- ・認知症サポーター養成講座の開催支援。
- ・認知症週間で地域の保健福祉センターを使つての啓発活動の実施。
- ・地域の徘徊高齢者の見守り(必要時)などを行っている。

4 活動を進めていく上での工夫・配慮

・認知症当事者のやりたいことを実現出来るかどうか、当事者も交えて検討する。スローガンではないが「みんな(チーム)でやったら出来る」が合言葉のようになっている。

・オレンジカフェの参加者を認知症当事者とその家族だけにしないようにしている。認知症サポーターではない地域住民へも周知を行い、参加を呼び掛けている。周知方法はサポーターによる口コミや案内のチラシの個別配布。社会福祉協議会の広報誌への掲載など。地域住民への啓発や理解促進も兼ねて、広く知ってもらえるようにしている。

- ・町の中央に湖があり、湖を境に生活区域が分かれている。
オレンジカフェも東西の地区別で分け2か所で開催を行っている。

5 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

- ・認知症当事者からは、「ここに来るのが楽しみ」といった言葉が聞かれ、出不精だった人も外出が出来るようになってきている。
- ・一人では出来なくてもみんな(チーム)でやったら出来る、という考えが浸透してきており、認知症当事者が自由に発言出来るようになってきた。
- ・予めサポーター活動の下地があったとはいえ、活動当初は「認知症」の言葉に抵抗感のある地域住民も多かった。回を重ねるごとに、地域住民の参加も増え徐々に認知症に対する理解や受け入れが出来るようになってきたと感じている。

＜課題＞

- ・オレンジカフェの開催は地区別の東西2か所で行っているが、西側の地区は対象者や参加者が少ないこともあり、開催頻度が減ってきている。開催場所を一つにすると来られない方もおり、今後の課題となっている。
- ・認知症サポーターの減少：町自体が自然減による人口減少が進んでおり、認知症サポーターのなり手が減っている。サポーターの世代交代が課題の一つである。

6 チームのアピールポイント

- ・認知症当事者が積極的かつ自由に、やりたいことへの発信が出来る。
- ・サポーターが非常に協力的。積極的に活動に協力してくれている。また、地域の情報や心配な方の様子などをチーム内で情報提供している。

7 今後の活動

- ・地域住民へ広く周知を行い、認知症当事者の交流の場として活動を継続していく。
- ・認知症当事者の能力を最大限活用しながら、出来ることを見つけてチームで一緒にやっていく。